第３号

広報誌

INUYAMA-GAKU

犬山学

第１回・第２回犬山学サロン、第５回犬山学勉強会開催

大縣神社

INUYAMA-GAKU | 2018.8 | 3rd ISSUE

筆文字：犬山城白帝文庫 理事長 成瀬淳子　表紙写真（提供）：大縣神社

名古屋経済大学 犬山学研究センター

第１回犬山学サロン　「犬山に伝えられた三つの物語と地名」

開催日時：2018（平成30）年2月6日㈫16：30～18：00　　場所：名古屋経済大学 5B2

犬山駅東口から「しろひがし住宅」に向かうと、その中に一つの公園が残されている。公園の中央には巨木があり「田中天神の森」として親しまれてきた。そして小さな祠には一つの物語が伝わってきた。キーワードは「水害」、実は犬山には水にまつわる伝承として、木曽川沿いには「やろか水」、また当地域最大の災害「入鹿切れ・天に昇った二匹の馬」の物語などがある。これらの伝承は洪水とその土地の関係を我々に教えているのだが、そこには街づくりのために奔走した、先人たちの叡智が刻まれている。

さて、田中天神の森のお話を続けよう。ここは、犬山街「はじまりの地」と考えてよい。おそらく中世末段階までは遡るだろうが、まずはそこに村ができた。だがこの場所には一つの欠点があった。はじまりの地と考える「田中天神の森」周辺は、犬山の台地上に位置するが、西側は湿地帯が広がり容易に水の浸かる場所であった。先人たちは豊かな水と水田・畑を耕作するに適した場所として、この土地に住みはじめたのだが、そこには水害という宿命がまっていた。そのため北・西側のやや高台へ移転することになる。その場所が「北宿」という街と「木之下城」であった。15c中頃のことである。街が整えられ、街道が整備されはじめるとより安心安全場所として、少し高台の木之下を開発し、そこに戦国時代の指導者はあらたな城館を作り始めた。その後16c中頃には、木之下城とその城下町は、戦国の戦略的な意味において現在の犬山城下町へと再び移転し、現在の犬山城下町の基礎をなしたのである。犬山の街は少なくとも三度の移転を繰り返し出来上がってきたのである。

田中天神の森の教えは、先人たちが残した街づくりへの教訓であり、この教えを無視し利便性だけを追い求めると、時に恐ろしい災害が近づいてくる。また犬山の街は台地上に存在しているのであるが、とても豊かな地下水を抱えていた。それは田中天神の森から西側に広がる湿地帯によるものであり、かつての城下町の豊かな井戸水文化の淵源はここにある。

ところで犬山に残された地名や言葉にはとても興味深いものが多い。地名はその土地の環境を言葉は来歴・物語を私たちに教えてくれる。「邇波」ということばがある。nihaと呼ばれその後はniwa 「丹羽郡」と変化した。つまり犬山扇状地そのものを意味する言葉であった。それははるか太古から繋がってきた地域の絆であり、同じ環境・風土の中で育ったものたちに共通する意識、それは部族社会がもつ原風景とつながり、地域文化の根源をなす。

なにげない街の風景や伝えられた物語の中に歴史のカケラを発見しよう。そこに未来を見据えた街づくりのヒントが隠れているのである。

講師プロフィール

NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク理事長　赤塚 次郎

奈良教育大学教育学部卒業、愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部主事、愛知県埋蔵文化財センター主査、副センター長、橿原考古学研究所共同研究員、奈良県桜井市纒向学研究センター共同研究員、愛知県史編纂考古執筆委員を歴任し、NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワークを設立。
専門は日本考古学、文化財遺産学。主な著作に『土器様式の偏差と古墳文化』（小学館、平成14年）、『幻の王国・狗奴国を旅する』（風媒社、平成21年）、『尾張・三河の古墳と古代社会』（同成社、平成24年）などがある。

第2回犬山学サロン　「地域コミュニティーにおける神社の役割～大縣神社と丹羽～」

開催日時：2018（平成30）年6月26日㈫16：30～18：00　　場所：名古屋経済大学 3B1

先ず七六九年の大洪水で木曽川の河道の移動、更に猿投神社の古絵図を参考に、木曽川扇状地の変遷、大縣神社創建当時の濃尾平野の状況を説明する。社名である大縣（大潟？）の由来引続き、当社御祭神神八井耳命（神武天皇の皇子・丹羽臣の祖）の御事績を述べ、命の氏族（神武天皇の第三世彦八井耳命）が崇神朝の前後に大和国葛城郡高尾張邑から美濃・尾張に本貫を移し、尾張丹羽の臣として農耕に従い、尾張本宮山頂に大氏神である神八井耳命を勧請したと伝えられる。

しかし二宮山から銅鐸が発見された事を考えると、尾張北部には古くからの土着の豪族邇波が君臨しており、尾張に移り住んだ丹羽臣は、婚姻等を通じて融合し、邇波氏の祭祀権、領主権を相続継承して丹羽県主として尾張地方に一大勢力をなしたと考えられる。

次に大和国葛城を本貫とする尾張氏は、崇神朝の頃にその氏族が尾張国に下り国造になっている。

本居宣長の説によれば、尾張連氏は、始祖天火明命を真清田神社に祀り、中島郡を中心に勢力を拡大する。

尾張氏以前の濃尾平野には、先住の丹羽氏、物部氏、特に安曇系海人族は弥生時代前期に北九州地方から農耕文化・金属器をたずさえ移住して大規模な集落を形成していたと考えられる。先代旧事本紀によれば、尾張氏は、大和朝廷成立の頃から朝廷に臣従、譜代の豪族の地位を確保し、大和朝と密接な関係を伝えている。

先代旧事本記巻第五天孫本紀には、尾張氏が初代国造「乎止与命」の子建稲種命と、丹羽県主大荒田命娘玉姫命との婚姻関係が物語るように、尾張氏は丹羽氏を始め諸豪族を治め、濃尾平野一円を支配下にして小国家を形成したと考えられる。

次に日本の神社とまつりについて

先ず奉斎形態として同床共殿・神籬・磐境・社殿の造営に分類して説明、次に奉斎主旨により至高神（皇祖畏敬・族祖敬仰・地域安泰）霊神・機能神に分類する。全国八万余の神社の九九パーセントは、五穀豊穣を願い、地域の繁栄、家内の安全を祈る鎮守の森に鎮座する氏神様（地域安泰）であり、日本人の氏神・氏子の関係について説明する。

私達日本人は幾世代に亘り、五穀が豊作に実りますよう、明日の生活が豊かでありますよう真剣な願いを氏神様に祈ってきた。その祈りの結晶が「まつり」である。まつりは神前での神事と神賑行事（山車・神輿渡御等）から成りたっている。「まつり」は地域住民が共同体を意識する絶好の機会である。神社が地域に果してきた役割は大なものがあると云える。昨今地域共同体の崩壊が叫ばれる中改めてまつりの重要性を考える機である。

ここ名古屋経済大学周辺に青塚古墳、三ツ山古墳群を始め篠岡古窯群等まさに文化財の宝庫であり、未発掘の古墳が多数報告されている。今後古墳の発掘が進み古代史が解き明かされる事を期待するものである。

講師プロフィール

大縣神社宮司　牧野　武彦

皇学館大学文学部国史学科卒業、談山神社権禰宜、長田神社権禰宜、大縣神社禰宜、神社神報社通信員、愛知県地方研修所主任講師、愛知縣神社庁理事、大縣神社宮司、国学院大学協議員、神社本庁参与、犬山市観光協会理事、皇学館大学評議員、伊勢神宮評議員、犬山市名所協会副会長、愛知縣神社庁副庁長、愛知県宗教連盟常務理事、神社本庁評議員などの要職を経て現職。神職身分特級。

第5回犬山学勉強会 「ジオ鉄®入門ー大地の物語を楽しむ鉄道旅への誘(いざな)い」

開催日時:2018(平成30)年1月22日(月)13:00〜14:30　場所:犬山市役所 205会議室

鉄道を利用しながら、沿線に広がる地質地形を楽しむ気軽な旅を通して自然科学に興味をもってもらいたい、そんな願いのもと始まった「ジオ鉄」(加藤ほか, 2009)は、鉄道旅行を知的に楽しむ新しい形のジオツアーとして注目を集めてきた。現在、深田研ジオ鉄普及委員会のメンバーを中心にジオ鉄の活動を続けている。

国土の約7割を山地が占める我が国では、縦横に張り巡らされた鉄道網と山地や河川の関係はとりわけ密接で、ジオと鉄道は切っても切れない関係にある。ジオ鉄では、そのようなジオと鉄道を通じて「見る・触れる・感じる」ことのできる地質・地形遺産や、鉄道と深く関わる文化遺産、鉄道着工に至る当時の苦難のエピソードを読み解き、ジオ鉄目線での沿線の見どころを「ジオポイント」として発掘している。

本勉強会では、ジオ鉄の取り組み(その活動と展開)として、2009年以来企画してきた9箇所のジオ鉄路線を軸に、学会発表・講演・商標登録(第5378786号)・委員会設立・新聞連載・フォトコンテスト等、これまで展開してきた具体的な活動とあゆみを紹介した。とくに、土佐くろしお鉄道ごめん・なはり線と三陸鉄道南リアス線・北リアス線で編集した「ジオ鉄マップ」を例に挙げて、企画立案から完成までの舞台裏とその後の展開、自然環境科学啓発における学術的基礎資料の一助としての期待のほか、沿線のジオ鉄ストーリーを読み解く楽しさについて述べた。

また今回、犬山で話題提供の機会を頂いたことから、「名岐鉄道全線名勝鳥瞰図」(吉田初三郎作、1935(昭和10)年発行)を改めて見直し、全国の鉄道沿線案内図を手掛けた絵師が、大正期から昭和初期にかけて犬山を拠点に活躍したことに思いを馳せた。

吉田初三郎は自身の著書『繪に添えて一筆集』(1930(昭和5)年発行)のなかでとりわけ、名勝日本ラインに対して格別な賛辞を記している。その木曽川の絶景の基盤を成しているのが、中生代三畳紀〜ジュラ紀の地層である。名鉄犬山線の列車に乗車すると、車窓西側にチャート(ジュラ紀の付加体)の上に建つ犬山城を望みながら、2001年まで鉄道道路併用橋であった「犬山橋」で木曽川を渡る(犬山遊園〜新鵜沼間)。犬山城の南西には木曽三川により形成された扇状地が広がっており、歴史的舞台でもある当地の地勢を地図で辿りながら、鉄道で巡る旅も面白いだろう。地元ではお馴染みの「石上げ祭り」や駅名「木津用水」など、用語の由来も興味深い。足を延ばせば、貴重な鉄道記念物の数々を有する明治村も程近く、調べれば調べるほどに豊富なジオポイントが浮かび、さまざまな角度からジオ鉄ストーリー創出の可能性をもつ、大変魅力的な地域であることをお伝えした。

「ジオ鉄を切り口として、これまで移動手段であった鉄道が、乗車すること自体にオリジナルの付加価値をもち、身近なジオ鉄風景の成り立ちを理解することで、地域への愛着がより一層深まる、そうしたきっかけやヒントになれば嬉しく思う。

ジオ鉄って?

ジオ鉄とは、鉄道を利用しながら沿線に広がる自然を楽しむ旅を通して、地球の成り立ちと大地の変化に想いを馳せることです。

地球や大地を表す言葉に用いられるgeo(ジオ)と、鉄道ファンの愛称「鉄(テツ)」にちなむ造語で、鉄道に対する親しみと敬意を込めて、ジオ鉄と命名しました。

公益財団法人深田地質研究所がこれを商標登録して(ジオ鉄®商標登録第5378786号)、普及活動を行っています。

ジオ鉄®公式ホームページ
http://fgi.or.jp/geo-tetsu/

深田研ジオ鉄普及委員会

講師プロフィール

深田地質研究所 主任研究員　藤田 勝代

高知大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)。2002年より財団法人(現公益財団法人)深田地質研究所の研究員を経て、現在、同主任研究員。専門は応用地質学、花崗岩地質学、文化地質学。2009年にジオ鉄を創始した発起人の一人で、これまでのジオ鉄活動全般に携わる。2013年 深田研ジオ鉄普及委員会設立、同委員兼幹事。主な近著『三陸鉄道ジオ鉄マップ』(2017年、深田研ジオ鉄普及委員会編)の編集責任者であるほか、ジオ鉄関連の研究発表多数。

広報誌「犬山学」第3号　発行日:2018年8月29日　発行:名古屋経済大学 犬山学研究センター　〒484-8504 愛知県犬山市内久保61-1 TEL:0568-68-3282 FAX:0568-67-0724 MAIL:inuyamagaku-c@nagoya-ku.ac.jp